（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	森本　裕子
論文題目	サンクション行動の適応基盤：リワードとパニッシュメントの機能		

（論文内容の要旨）

本論文は，サンクション（賞罰）行動の適応基盤に関して，実験法と質問紙法を用いて実証的に解明したものである．6章，8個の研究から構成されている．

第1章は「序論」である．サンクション行動研究の基本的概念を整理し，その背景にある適応論的アプローチについて論じている．1.1では，本論文の目的を述べ，1.2では，適応論的アプローチ，1.3では，本論文の用語と問題を整理し，1.4では，全体の構成について述べている．

第2章「利他行動およびサンクション行動の適応基盤に関する研究動向」の2.1では，利他行動の適応的基盤について概観している．2.2では，サンクション行動に関連する諸要因として，社会的ジレンマ状況において利他行動を引き出す一般的信頼，および，制度的側面であるサンクションとその問題点について展望している．2.3では，2次的ジレンマ問題解決の議論を整理した上で，リワードとパニッシュメントの適応基盤について，集団と個人の各レベルについて論じ，本論文の位置づけをおこなっている．

第3章「リワードとパニッシュメントの差異」では，3.1（研究1）において，応報性尺度の開発を通じ，リワード（褒賞）とパニッシュメント（罰）の行動傾向と心的基盤が異なることを示している．3.2（研究2）では，状況の不確実性がリワードとパニッシュメント選択に及ぼす影響を検討し，それぞれに有効な社会的状況が異なる可能性を示唆し，関係流動性の高い社会におけるリワードの必要性という観点から論じている．

第4章「公正なパニッシュメントと不公正なパニッシュメント」では，4.1において，パニッシュメントとフェアネスに関する先行研究の議論を展望し，4.2（研究3）では，公正自己尺度を開発している．4.3（研究4）では，社会的ジレンマゲームとパニッシュメントゲームの結果，一般的信頼の高い群では公正自己の低い人が，一般的信頼の低い群では公正自己の高い人が，パニッシュメントを多く行うことを見出している．4.4（研究5）では，質問紙調査を通じ，パニッシュメントは，非協力的な行為に対し公的な注意・警告を与える「戒め」と感情的で私的な罰を与える「報復」の2因子が抽出し，公正自己の高い人は戒めを，低い人は報復を行うことが示されたとしている．4.5では，研究4と研究5で得られた結果の矛盾を解消するために，山岸（1998）の信頼の解き放ち理論をもとに統合的に論じている。

第5章「パニッシュメントの利己者排斥効果および他者の顔記憶との関連」では，5.1（研究6）において，様々なパニッシュメント行為者に対する評価実験の結果，戒め的パニッシュメント行為者は利他主義者から親切で信頼でき友だちになりたいと評価される一方，利己主義者から敬遠されること，さらに，パニッシャへの好意度は，パニッシャへの信頼性評価によって予測できることを明らかにしている．5.2（研究7）では，応報性尺度によりパニッシュメントとリワードの行動傾向を測定し，未知顔記憶の正確さとの関連を検討し，パニッシュメント行動傾向の高い参加者は顔再認成績が低く，リワード行動傾向の高い参加者は，再認成績が高いとしている．5.3（研究8）では，他者の利他的また利己的行動描写文に対する評定値を多次元尺度解析した結果，信頼性評価はルール志向性と，親切さ評価は他者志向性と，それぞれ関係していると主張している。5.4では，パニッシュメントへの評価の揺らぎと，それに関連したパニッシャの認知コストについて論じている．

（続紙　２　）

第6章「全体考察」では，6.1では，第3章から第5章までで得られた知見についてまとめ，相互の関係について論じ，6.2では，先行研究および本論文で得られた知見を元に，全体を説明するモデルを提案し，改めてサンクションの適応基盤について論じている．6.3では，本論文の意義と今後の展望を述べている。

注)論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は１頁を３８字×３６行で作成し、合わせて、３，０００字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、４００～１，１００wordsで作成し審査結の要旨は日本語５００～２，０００字程度で作成すること。

（続紙　３　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は，サンクション行動の適応基盤におけるリワードとパニッシュメントの機能に関して，実験法と質問紙法を用いて実証的に解明したものである．オリジナルな実験材料と実験パラダイムを用いた8つの研究を行い，さらに，リワードとパニッシュメントの適応基盤についてのモデルを提案している．
その論文の特色は以下の3点である．

(1) 従来十分に解明されていなかったリワードとパニッシュメントの機能的差異や個人差要因を明らかにしている点
(2) パニッシュメントにより個人が得る利益として，利他的な人から信頼を得ること，利己的な人を遠ざけることを見いだした点
(3) サンクション行動研究のための実験と調査に基づく巧みな研究手法と材料を開発し，多角的にアプローチしている点

第1章では，本論文の目的として，サンクション行動をする個人の目的，特にパニッシュメントをおこなうことによる利益の解明を挙げている。パニッシュメントによる個人の利益に着目した点に，本論文の着眼点の鋭さが見られる．
第2章では，サンクション行動の研究動向について，適応論的観点から，従来の研究を比較検討し，(a) サンクション行動の適応基盤は，人間特有の非血縁者間の大規模相互利他行動とかかわること，(b) サンクション行動，特にパニッシュメントの適応基盤については未解明な点が多いことを指摘して，従来の研究の問題点と本研究の目的を明確化している．
第3章の研究1では，応報性尺度を開発し，リワードとパニッシュメントの２つの行動傾向を見出した点，研究2では，工夫されたサンクションゲーム実験に基づき，リワードとパニッシュメントの選択及び評価に，一般的信頼性が影響することを見出した点は，この分野における重要な貢献である．
第4章の研究3では，公正自己尺度を開発し，研究4では，公正自己と一般的信頼度がパニッシュメント行動に影響を及ぼすことを明らかにし，研究5では，パニッシュメントを，非協力的行為に公的な注意・警告を与える「戒め」と感情的で私的な罰を与える「報復」の2つに分け，公正自己の高い人は戒めを，低い人は報復を行うことを明らかにしたことは，この分野に新たな知見を加える貢献である．
第5章の研究6では，利他主義者と利己主義者を実験ゲームによって判別し，戒め的と報復的なパニッシュメントに対する評価が異なることを明らかにした点，研究7では，リワード行動傾向が未知顔記憶の正確さを高め，パニッシュメント行動傾向を低めることを明らかにした点は新たな発見である。研究8では，評定実験に基づいて，信頼性はルール志向行動，親切は思いやり行動に基づく評判であり，パニッシュメント行為者はルール志向行動がゆえに利己主義者から高く評価されるという示唆は，重要である．
第6章「総合的考察」で提案した研究全体をまとめるフレームワークは，この研究分野の理論的展開への貢献である．さらに，今後の課題として，関係流動性の直接検討の必要性やパニッシュメント行為者の得る間接的利益の問題などを明確化している点は，評価できる．

（続紙 4 ）

以上のように本論文は，サンクション行動の適応基盤におけるリワードとパニッシュメントの機能的差異に関して，オリジナルな着想に基づき，新たに開発した巧みな実験法や質問紙法を用いて，重要な多くの成果をあげているが，今後に残された問題として以下の点が指摘できる．

(a) 一般的信頼感と関わる関係流動性に関しては，測定が必要であり，また，コミットメントや安心感からの考察が必要なこと
(b) 研究を通したゲーム実験状況の一貫性，現実世界における適応との連関，参加者のゲーム状況の認知などさらなる検討が必要なこと
(c) 利他-利己主義については状況要因や利他-利己の連鎖に基づく検討が必要なこと

しかし，こうした点は，本論文で見出された多くの新しい知見の価値をいささかも損なうものではない．

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める．また，平成23年2月2日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた．

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降